令和8年度

土成中学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

〇「聴く（基盤）・つなぐ（思考・探究）・挑む（主体性・持続）」を通じ、自らの学びを幸せに還元できる生徒の育成
・相手の目を見て最後まで聴き、他者を尊重する「共感的な聴き合い」ができる 。
・習得した知識・技能を、ICTや対話を通じて、新たな価値を共創できる 。
・ 失敗を恐れずポジティブに挑戦し（明るく）、目標達成まで粘り強く学び続ける（根強く）ことができる 。

校長　三橋和博

学力向上推進員　塩田直也

◎次の（１）～（３）をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

【各校の取組状況の把握について】
管理職による授業参観や試験結果や意識調査の分析より取り組み状況を把握する。

（１）知識・技能の習得

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇漢字や英単語の読み書き、計算などの基礎的な課題に対して意欲的に取り組める生徒が多い。 ●授業中、話を「最後まで聴く」ことができず、指示や説明の断片しか理解できていない生徒がいる。 ●「どうせやってもわからない」という苦手意識が先行し、課題に対して最初から投げやりな態度をとる生徒がいる。 ●学力に二極化が見られる。苦手な生徒は、学習内容を難しく感じ、集中力を欠いている。	・傾聴を通じた基礎力の定着 「聴くことは相手を尊重すること」を理解し、相手の目を見て最後まで聴くことで、学習の基盤となる知識や技能を正確に受け取ることができる。 ・粘り強い学習態度 知識・技能の習得に向けて、あきらめず粘り強く努力し続けることができる。 ・自己肯定感を伴う習得 「わかった！」「できた！」という実感を持ち、自らの知識の獲得や技能の上達を前向きに捉えることができる。	・「聴く姿勢」の徹底指導と授業ルーチンの確立 全ての授業において「目を見て聴く」姿勢を指導の起点とし、情報を正確に処理する力を養う。 話す側と聴く側の双方向の尊重を促す「聴き合い、磨き合い」の場を設定する。 ・ポジティブ行動支援（PBS）を活用した学習意欲の喚起 「知識・技能」の習得過程における小さな成功を具体的に認めることで、学習への獲得的要素を高める。 ・教育DXと自己調整学習の推進 デジタルポートフォリオ等の教育ツールを活用し、生徒一人ひとりにあわせた学びを支援する。			

（２）思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇相手の意見をしっかり聴こうとする気持ちと、共感的なコミュニケーションを大切にしようとする気持ちがある。 〇自分の考えや思いを伝えようとする気持ちはある。 ●相手の表現を単に受容するだけでなく、その意図や根拠を正確に把握し、多角的な視点から「心で考える」力に改善の余地がある 。 ●自分の思いを断片的な言葉で終わらせず、根拠に基づいた適切な構成で、他者に納得感を与える「磨き合い」の表現がまだ十分ではない 。 ●情報の中から必要なものを取捨選択し、自分なりの考えを構築するディープラーニングへの繋ぎ込みが課題である 。	・多角的な視点を持つ生徒（明るく・前向きに） 課題に対してポジティブに向き合い、多様な価値観をもつ人々と共に新たな価値を創造できる。 ・根拠に基づき、論理的に発信する生徒 聴き合い、磨き合いの過程を通じて、自分の考えを整理し、相手に伝わる言葉や方法で表現できる。	・「聴き合い」を起点とした授業の展開 単なる知識や技能の授受ではなく、プロセスを共有し、他者の意見を尊重しながら（傾聴）、自ら考えを深める「聴き合い」の場を設定する。 「目を見て聴き、心で考える」習慣を徹底させ、情報を判断する基盤を養う。 ・自己調整を生かした学びの展開 自己調整の機会を確保し、情報の収集・分析・整理をさせる。 教師自身が「好き」を育み「得意」を伸ばす個人探究を実践し、その学びを生徒の学習に生かす。 ・ポジティブ行動支援による表現の動機付け 教師が価値付けをすることで、心理的安全性の高い環境を構築する。			

（３）主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況（〇よさ・●課題）	具体的目標（目指す子供の姿）	具体的方策（教員の取組）	中間期の見直し	達成状況（評価）	次年度における改善事項
〇落ち着いて課題に向き合うことができる生徒が多い。 〇目標や手順が明確な場面では、粘り強く取り組むことができる生徒が多い。 〇表向きの発言は控えめであっても、自分の考えを心の中で深めることのできる生徒もいる。 ●「やるべきこと」を与えられるのを待つのではなく、自らを起点に、自立的に学習を調整する力を持つ生徒が少ない。 ●失敗を恐れず、自分の意見を「前向きに挑戦」して発信する意欲を持つ生徒が少ない。 ●自らの成長を客観的に捉え、主体的に次の目標を設定する習慣が身に付いている生徒が少ない。	・自己調整する生徒（根強く） 粘り強く、自分の学習状況を客観的に捉え、目標達成に向けて必要な努力や工夫を自ら進めることができる。 ・「好き」を追求し、学びを楽しむ生徒（明るく） 自身の興味・関心や「得意」を大切にし、課題に対しても前向きに挑戦し、知的好奇心をもって取り組むことができる。 ・ 他者との関わりの中で学びを深める生徒 共感的な姿勢で周囲の意見を聴き、協働的に学ぶことで、自己の成長だけでなく、周囲にも良い影響（幸せの種）を与えることができる。	・自己調整学習を取り入れた「振り返り」の充実 自己調整の軌跡を蓄積し、生徒が自らの成長を「見える化」することで、自己肯定感を高め、次の学習意欲へと繋げる。 ・PBSによる意欲の価値付け 結果だけでなく、試行錯誤の過程や「あきらめず」に取り組む姿勢を具体的に認めることで、主体的な学習態度を強化する。 「できた！」「認められた！」という体験を積み重ね、自律的な学習者としての自信を育ませる。 ・ 教師の「個人探究」を通じたモデル提示 教師自身が探究活動を実践し、学び続ける楽しさを背中で示すことで、主体的に取り組むことのよさを伝える。			